

弟子たちの舟は一晩中、逆風に悩まされ、先に進めませんでした。夜明け頃、イエスが水の上を歩いて彼らの舟へと近づいてきたのです。イエスが湖上を歩いたのは、神さまは水の上をも踏破するという旧約聖書の言葉を背景にして理解されます。イエスを見た弟子たちは「幽霊だ」と言っておびえ、恐怖のあまり叫び声をあげました。イエスは弟子たちに「安心なさい。わたした。恐れることはない」と語りかけます。「わたした」というのは、旧約聖書では神さまがご自身を現わす時を表現する言葉です。また、「恐れることはない」という言葉は、ルカ福音書のイエスの誕生物語にも見られるように、神さまと出会い、神さまの栄光に触れた者に神さまが恵みをもって臨んでいることを告げる言葉です。その恵みは「安心なさい」という言葉です。イエスは神として自身を現し、彼らを慰め、力づけているのです。

28～31 節は著者が伝承を素材にして挿入したものであると考えられています。著者はイエスの顕現物語を書き加えることによって、復活させられたイエスと共に生きる自分たちの共同体を励ますのです。ペトロはイエスの「わたした」という言葉に答えて、「主よ、あなたでしたら」と言いました。このペトロの言葉には、イエスをキリストと告白する原初の信仰告白が反映しています。イエスはペトロの告白に答えて、「来なさい」と言いました。ペトロはイエスの言葉を信頼し、舟から下りて水の上を歩き始めました。一心にイエスを見つめ、イエスの言葉に信頼して歩むことによって、ペトロは確かに水の上を歩いたのです。けれども次の瞬間、ペトロはイエスを見つめていた目を逸らして、風によって逆巻く波を見てしまい、恐ろしくなり、沈みそうになり、「主よ、助けてください」と叫びました。イエスはすぐに手を伸ばしてペトロを捕まえ、「信仰の薄い者よ、なぜ疑ったのか」と言います。

この「信仰の薄い者よ」という言葉は、聖書ではイエスを信頼しない人たちに向けられることではなく、イエスを信頼して従っている弟子たちに向けられる言葉です。この言葉はどのような状況でも怖れることなく、神さまに委ねきってイエスに従うように弟子たちを励ます言葉なのです。このペトロの姿は、復活させられたイエスを信頼してこの世を歩む教会の姿、また信仰者一人ひとりの姿なのです。

イエスはどんなに状況の中にあっても、思いもかけない方法でやってきて「安心なさい、恐れることはない」と声をかけて勇気づけ、困ったときには手を差し伸べ「なぜ疑うのか」と問いかけます。イエスはいつも私たちのそばで、神さまと私たちの関係を確かなものに導いてくれるのです。この物語はそのことを私たちに示しているのではないかと思うのです。